

\* 「また、酒に酔ってはいけません。そこには放蕩があるからです。御霊に満たされなさい。」（エペソ5：18）酒は良い気持ちにさせるが、依存して悪魔の餌食になり、放蕩の元になる。本物の霊、聖霊に満たされなさい、とパウロは言う。そのためには、「詩と賛美と霊の歌とをもつて、互いに語り、主に向かって、心から歌い、また賛美しなさい。」（5：19）

「詩」は詩篇、「賛美」は詩篇以外の定型的な賛美の歌、「霊の歌」は神をたたえる一般的な讃美歌と考えられる。これらをもって「互いに語り」なさい、という。これは、賛美はメロディーよりも「ことば」が大切であることを示すと同時に、「賛美は交わり」であることを表している。同じ信仰を持っている者たちが賛美によって信仰を深めることができるという意味がある。

\* 「ですから、私たちはキリストを通して、賛美のいけにえ、すなわち御名をたたえるくちびるの果実を、神に絶えずささげようではありませんか。」（ヘブル13：15）旧約時代は礼拝のとき、自分の身代わりとして罪の赦しのために動物を「いけにえ」として神にささげた。しかし、キリストご自身が「いけにえ」となってくださったので、今は必要がなくなった。その代りに私たちがすべきささげものは「賛美」といういけにえである。十字架の愛という大きな愛を与えてくださった神にいつもその御名をたたえる賛美でお返しことが勧められている。宗教改革によって教会で一般信徒が声を合わせて歌う会衆賛美が生まれた。歌う賛美歌として作られた詩篇は角笛や笛、団バリンやシンバル、様々な弦楽器を用いて賛美していた。現代は賛美の形も、楽器の種類も多くなり変わってきたが、大切なのは「主に向かって心から歌う」ことである。

\* 「いつでも、すべてのことについて、私たちの主イエス・キリストの名によって父なる神に感謝しなさい。」（エペソ5：20）神は私たちに日々恵みを与えてくださり、すべてのことを働かせて益としてくださる方である。私たちはいつでもどんなことにも感謝をささげることによって応えたい。主イエスも常に父なる神に感謝をささげておられた。「感謝」も「賛美」とともに「いけにえ」として神にささげるものである。「感謝のいけにえをささげる人は、わたしをあかめよう。その道を正しくする人に、わたしは神の救いを見せよう。」（詩編50:23）